

驟雨

映画文学人生論

原作：吉行淳之介 (1954) 「文学界」
参考：原色の街 (1951) 「世代」
砂の上の植物群 (1963) 「文学界」
闇の中の祝祭 (1961) 『講談社』
軽薄のすすめ (1972) 「角川文庫」
吉行めぐり『梅桃が実るとき』1986) 「文園社」

そのとき、彼は胸がときめいていることに気がついた

吉行淳之介は昭和二十九年に会社員と娼婦との恋(?)を描く『驟雨』で芥川賞を受賞、安岡章太郎らとともに第三の新人として注目をあびた。経歴をみると、昭和十九年に徴兵検査を受けて甲種合格。運動神経は悪くなさそうだが、気管支喘息と診断されて、即日帰郷。昭和二十年五月の東京大空襲で焼け出された。したがって、戦争体験、空襲体験がゼロではない。

それまでは死ぬことばかり考えていたが、昭和二十年八月十五日を境に生きることを考えなくてはならなくなる。結局、戦争が終わって彼に残された二つの大きなものは、行き場所を失ったような虚脱感と人間に対する不信の気持であったといえる(『軽薄のすすめ』)。

『驟雨』の主人公山村英夫は大学を出て三年目の独身サラリーマン。作者は大学を中退し、結婚していたから、主人公そのものではないが、娼婦との恋(?)は実体験によるものかもしれない。

山村英夫は、約束の時間に女と待ち合わせた場所へ行く途中の路上で胸がときめいていることに気づき、自分の心臓に裏切られた心持になった。これではまるで恋人に会いに行くような状態ではないか。

女を彼は気に入っていたが、気に入るといふことは愛するとは別のことだと彼は思う。「愛する



驟雨

映画文学人生論

ことは、この世の中に自分の分身を一つ持つことだ。それは、自分自身にたいしての顧慮が倍になることである」。そこに愛情の鮮烈さもあるだろうが、わずらわしさが倍になることとしてそれから故意に身を避けているうちに、胸のときめくという感情は彼と疎遠なものになったはずだ。

娼婦との恋(？)を描いた先人の名作には永井荷風『墨東綺談』があるが、荷風の小説の主人公大江匡はときめいたりはしない。この世の中に自分の分身がいるなどということは考えもしない。

その点、『驟雨』の山村英夫の感性には初々しさが残っている。五十年代後半の『墨東綺談』の大江匡との年齢差は大きい。ただし、自分の子孫を残さないという意志は二人に共通している。

山村英夫は娼婦の街に通い続けるために曾祖父から伝わった「水心子正秀」の銘刀を売った。女のために先祖伝来の品を手離すという気持ではなく、山村家の家系を自分で断絶してしまおうという密かな気持があつて、その方へ力点がかかっているのだと、自分の行為を解釈していた。

NHK名作ドラマの原作となつた吉行あぐりの半生記『梅桃が実るとき』によれば、淳之介は生後十ヶ月で、祖母の指示により、父エイスケ、母あぐりと別居し、祖父母に育てられた。三島由紀夫と境遇が似ている。

それはまるで緑色の驟雨であつた 吉行淳之介